



選考委員特別賞
リリー・フランキー賞

わたしの心ぞう、そして夢

足立区立鹿浜西小学校 四年

江渡 くるみ

わたしは、十才。生きている。毎日を生けん命、生きていく。

平成八年四月、三五七六gで生まれた。

「女の子ですよ。おめでとうございます。」すぐに、体をふいてくれて、助さんしさんが、ちょうしん器をあてた。何度も何度も。

「心ぞうの音に、ざつ音がある。」

たい院までの間、わすれるようにしていた、お母さん。おっぱいをあげたり、オムツをとりかえたり、すごくいそがしくすごした。

たい院の日、しん察をした先生から、

「連休に入ってしまったから、明日必ず、大学病院に行つてほしい。」

しょうかいじょうをわたされた。

明日必ずという言葉が、とても大きく聞こえたお母さん。何年かたつてから、先生に会いに行つたら、

「すぐにも、行つてほしいという気持ちが大きな声になったよ。」

と、話していたそうだ。

次の日、オムツやきがえ、ひっこし荷物のような大荷物を持って、大学病院へ向かった。

名前がまだ決まっていなかったので、

「えとべビーちゃん」

これがわたしの名前だった。身長と体重をはかり二時間後、しん察室によばれた。

まずはけんさ。レントゲン、心電図、エコー、さい血。このけんさセットは、今でも同じ。全てのけんさが終わったのは、お昼すぎ。その後二時間待って、しん察室に

よばれた。

先生は、だっこしたお母さんがイスにすわるとすぐ、「心室中かく欠損です。」

その後は、お母さんの記おくにない。病気のないようや、手じゅつをしなければいけないこと、二十分は続いたが、ポーツとしていたお母さん。待ち合い室のペビーカーへ向かっていると、先生があわてて出てきた。病気の名前と心ぞうの絵と、これからしなければいけないことが書いてあった。

先生は、ちゃんと帰れるか心配이었다。お母さんは、フラフラだったそうだ。

毎週大病院へ通い二カ月。心ぞうをせん門に手じゅつをする病院をしようかいされた。

またしようかいじょうを持って、同じけんさセットをして、しん察室へ。この時は、お父さんもいっしょだった。

手じゅつをしなければ助からないこと、手じゅつまでの予定、気をつけなければいけないこと。受けつけて次

の予約をして、ろう下へ出た。お母さんは、わたしをだっこしたまま、わんわん泣いた。お父さんも同じだった。

毎週通って一カ月、お母さんは決めた。実家の近くの大病院へ向かった。その日は、電車がとまり、急行から乗り変えた人がいっぱい、ぎゅうぎゅうの電車の中だった。ペビーカーをおされ、わたしが大泣きをした時、きぶんが悪くなったお母さんがしがみこんでいたら、「おさないで下さい。赤ちゃんがいます。」

とても、大きな声を出してくれた女せいがいた。お母さんは、

「ありがとうございます。」

何度も頭を下げた。

駅へつくと、大病院のバスに乗り受けつけへ。おはあちゃんが待っていた。

大病院でしん察室へ入り、初めて会う先生に、お母さんは言った。

「本当に心ぞうの手じゅつをしなければ、いけないのですか。手じゅつのキズはどのくらいなのか。」

たくさんしつ問したそうだ。

まずは、けんさをしてから。またまたけんさセット。

いっばいまって、よばれた。

先生は、手じゅつをしなければいけないこと、お母さ

んのしつ問に全て答えてくれた。

お母さんは、決めた。

「手じゅつをおねがいます。」

それからが大変だった。毎週かた道二時間バスと電車
で、大病院へ通った。

電車が止まったり、雨だったり、電車の中でおっぱい
をのんだり、手じゅつまでがいちばん大変だとお母さん。

シナジスという、手じゅつまでの間何万円もする注し
もいっばいした。

ちっとも大きくならないじょうたい、はい高血あつし
ようで、いよいよ七カ月で手じゅつ。個室だったが、入
院の日からが、本当の大変だった。手じゅつの前にけん
さ入院した時は、三日で帰れたけど今度は三週間。お母
さんは、外に出られない、温い物が食事出来ない、頭が

へんになりそうだった。

でも、手じゅつの前の日、ずっと泣かなかったお母さ
んは、手じゅつの後に入るNICUを見学してワンワン
泣いた。広い所にアラームの音、つながれたたくさんの
点てき。ベッドにいた入院中の2人の子どもを見てびっ
くり。その夜は、なかなかねむれず、夜中三時に、個室
のシャワーをあびた。朝五時に起きたわたしは、おなか
がすいてずっと泣いていたそうだ。手じゅつ前は、何も
口にできず泣きっぱなし。うでがいたくても、ずっとだ
っこしてくれた。

手じゅつは朝八時から。お父さん、おじいちゃん、お
ばあちゃんも一時間前から大集合。真っ白の服に着がえ
て手じゅつ室へ。中へ入るのは、お母さんとわたし。今
度は、お母さんも、真っ白の服とマスクをして、だっこ
で手じゅつ室へ。

アンパンマンの曲がかかっていた。白衣のわかい先生
たちがたくさんならんでいた。手じゅつ台へおりたわた
しは、泣き出した。すぐにますいされ、お母さんは、

「おねがいます。」

「くーちゃんまたね。」

と、外へ出た。

おじいちゃん、おばあちゃん、お父さんは、ろう下で待っていた。少し話をして、おじいちゃんとおばあちゃんは、一度自たくへ帰った。

手じゅつ七時間。

手じゅつ後、ねむっているNICUで、やっと会えた。

たくさん、つながれていてびっくり。一度、心ぞうをとめて行う手じゅつだから、しかたない。先に入ったおじいちゃんとおばあちゃんは、赤い目だったそうだ。

東京へ仕事にもどるお父さんが、朝五時に出るので、四時に病院へ来ると話し、おじいちゃんとおばあちゃんの家へ。

夜九時、病院からの電話が鳴った。

「くるみちゃん、目をさしました。」

朝、病院へ向かうことを言い、お母さんはほつとした。

朝四時、NICUへ入るとびっくり。手じゅつをして

くれた二人の先生、ねむそうな目で待っていてくれた。一ばんずっと、ついてくれたそうだ。

お母さんは、この先生たちに、おまかせしてよかった、心から思った。

ここまでの話しは、お母さんが何度も何度も話したので、おぼえてしまった話。

わたしの心ぞうは、たくさんの人の力で動いている。だから、せいっぱい生きています。

ようち園は、毎月病院へ。体力がないのでねむくなり週一回は早帰り。プールはラッシュガードで、きずをかきました。小学校ではリレーの練習後顔が白くなり先生はあわててお母さんへ連らく。

いろんな事があり、それでも一生けん命生きています。お父さんとお母さんが仕事をしているので、わたしは

弟と学童へ通っている。去年くやしくて、泣いて帰った。

「くるみバカ」

と、書かれた紙を、学童のゴミ箱へ、すてて帰ってきた。お母さんは、わたしの話を聞いて、学童へ走って行った。

ゴミ箱をさがして、その紙を持ち帰り、書いた男の子の家へ。

どうして、くるみがバカなのか。勉強は、これ以上の成績の子はいないと思うくらいの通知表、なぜなのか。

お母さんは、生きるか死ぬかの手じゅつをした子どもがせいっぱい生きるじゃまをしないでほしいと話した。

男の子も、そのお母さんも、泣きながら聞いていた。その子が話した。一年間ずっと、男の子達からわたしがオランウータンとよばれている事、ごめんなさいとあやまってくれた。二度としないことを約そくしてくれた。

その夜、男の子の家に、お母さんは、一件一件電話をした。お母さんとぎゅーっとした。

「がんばっていこう。」
と、ぎゅーっとしていっしょに泣いた。

わたしは、スイミングも、運動会の応えん団もリレーの選手も勉強もいっぱいがんばっている。

今、生きている事がうれしくて、夢がある。新生児室

の先生になりたい。

わたしが生まれた時に、ざつ音が聞こえたように、いろいろな病気で生まれる赤ちゃんもいる。その時に、わたしにしかわからない、わたしにしか出来ない医としての対応をしたいからである。

江渡くるみだから、出来る医しをめざして、せいっぱい生きる。